

永井龍男

朝

霧

改造社版

昭和二十五年六月十日 印刷
昭和二十五年六月十五日 發行

朝霧

定價貳百八拾圓

著者 永井龍男

發行者 平田貫一郎

東京都中央區京橋一ノ三

印刷者 北川武之輔

東京都中央區銀座西六ノ二

發兌 改造社

東京都中央區京橋一ノ三

振替 東京八四〇二
電話 京橋一六二〇・五六一九

所製本高小
版社株式會社
活川細

二ノ一町問久佐
座六ノ一
銀西區南
中央區港
都東京
所製本刷印

目 次

朝霧

五

花火

三

子供のアルバム

五

『あひびき』から

八

バースデー・ブツク

二三

胡桃割り

一七

——ある少年に——

麻の上着

一五

、往來

一七一

へちまの棚

一九五

菊と飛行機

二三五

ペロツケ

二五五

、竹藪の前

二八五

ある夏まで

三二五

あとがき

三六五

◇ 裝 幀 式 場 俊 三 ◇

朝霧

「では、——行つて來ます」

「はう」

ていねいに靴を履き終つた背の肥つた老人が、立上るなりおもむろに振り返つて、チョッキのポケットから、例の如く大型な時計を出して見る。

「たぶん、今日の歸りは、五時……十七分くらゐになりませう」

「はいよ」

X氏の口調の折り目正しさに比べて、送り出してゐる老妻の應待は、二度目の早口な「はいよ」にも感じられるやうに、市井の妻として、多年生活を切り廻して來た上でなければ得難い、枯れた簡潔な響きを持つてゐる。

X氏の黒い折り鞆は、仔豚ほど、いつもふくれ上つてゐる。いつたい何が入つてゐるかといふ

事も、あとで話題になると思ふが、當時私が簡単に想像したやうに、教科書その他の参考書や、試験の答案などがぎつしり詰つてゐるのだらう、といふことに今はしておきたい。

硝子戸を引き、その鞆に手をかけて、X氏は出て行かうとする。だが、足の運びに何か思ひ惑ふ様子がある。果して、老人は再び鞆を上り口へ置く。

「いま、たしか五時十七分——と、云ひましたな」

「はいよ」

「思ひ違ひでした。五時七分には歸ります」

「はう」

かくく受け答へをし乍ら、老妻はさつさと靴ペラを片付け、其處にある下駄へ足をのばす。X氏の後を追ふやうにして、或ひは追ひ立てるやうにして玄關を出ると、箒をとり勝手口へ廻る。餘計な挨拶も時間もその間には無い。いつものやうに、玄關の内外が、これから掃き清められるのだ。

すると、もうかなり先きまで行つてゐた筈のX氏の靴音が、もう一度其處へ戻つてくる。

「さつき、ね……」

「はいよ」

「五時七分——と云ひましたが、やはり、今日は五時十七分になりませう」

「はい、分りましたよ」

白墨の荒れの年中取れたことのない手へ、重さうな鞆を持ち直すと、X氏は相變らずの步調で歩きはじめ。その間も箒の音は休まない。

——X氏の出勤に際して、いつ頃からか毎朝必ず繰り返される習慣となつた、かうした行爲は、回数にしても今朝の程度で終るとは限らない。現にその邊から、又戻つて來さうな後姿も豫想されるのだが、記述の繰り返しは略すことにしたい。

従つて、以上の老夫人の應答が、世間によく見うけるやうな、愛情の涸れた結果からくる無表情で無いばかりか、老妻の應答が出来るだけ、いつもと異なる事が、X氏の安心と判定を早めるために、必須の條件となつてゐるのを知らなければならない。

「はいよ」といふ簡潔な返事を、老夫人が発見するまでには、相當な時間をかけてゐる。「分りましたよ」とか、「さうですか」とか、多少とも煩はしいといふ風な、或ひは前日と異つた應答をしたために、X氏の判斷を悩ました苦い經驗は二度や三度ではなかつた。そんな場合の記録と

して、歸宅時間の豫定變更を、わざわざ澁谷驛から通告しに戻つたことがあるのだ。

歸宅の時刻を豫告して置かなければならないやうな、重要な用件が、氏を待つてゐるのでない事は勿論、氏及び氏の家庭生活の上に、不幸な雰圍氣がたゞよつてゐるといふ風なこともまつたくないのである。

實はこの私も今日まで十年近く、勤人生活を營んで來てゐる者であるが、或る時、釣堀の鯉が一定の游行コースを持つてゐて、それ以外の道は決して通らないといふ話を聞き、感にうたれたことがある。つまり、勤人生活といふものは、非常にこの釣堀の鯉の習性に似てゐるのであつて、生活の軌道を外すことを極度に好まない。家を出てから、勤め先へ達する順路にした處が、餘程の用事か突發事故のない限り、毎日通ひ飽きてゐる筈の道順を、變更する意慾は起きないものである。

もし、X氏のかうした行爲を、健康でないといふ人があるならば、多かれ少なかれ、われわれ勤人は一種の病氣のやうなものにかゝつてゐるのだと、答へることも出来るかと思ふ。

X氏は、東京の郊外に住んでゐた。

家から驛まで徒歩で十分、更にその郊外電車を、澁谷で省線に乗換へ、市中の或る中學校へ通

つてゐた。

受験學生のための註釋書を出版し、その印税で其處に家を求めてからも、判で捺したやうな教師生活は七八年續いたのだから、諸君の學校生活の歴史に於て容易に連想される、數々の人物と共に、氏の「毎日」は相當な永さを持つて續いたと、云ふことが出来る。それ故もし私が、類型的な古めかしい想像のX氏の上に及ぶのを恐れるとすれば、

——タイユ老人には娘が三人あつた。アンナといふのが、總領だが、家の中では誰もアンナの名前を口にしないことになつてゐた。二番目の娘はローズといつて十八、末娘のクレールはまだほんの子供で、やつと十五になつたばかりだつた。

女房に先立たれたタイユ老人は、ルブリュマン氏の鉦工場で機械掛りの職工長をしてゐた。人望があつて、曲つたことが大嫌ひで、口養生のひどくやかましい、いはゞ模範職工とでもいふ律義者だつた。一家はル・アーヴルのアングレーム街に住んでゐた。

——といふ風に、これは手近かにあつたモーパッサンといふ人の、短篇小説の書き出しを利用したのだが、人物と環境をフランスなりアメリカの一小都市に持つて行つていたといへも、一向に差支へないのだ。

手當り次第に引用した文章を、ついでに役立たせるとすれば、「曲つたことが大嫌ひで、口養生のひどくやかましい律義者」といふ處はそのまゝぴたりと當てはまるが、アンナやローズやクレールなどといふ娘をX氏が持つてゐる筈はない。

X氏と私との間に師弟關係はなく、氏の晩年時代に、その住宅の極く近くへ私が居を移したのも、まったく偶然であつた。たゞ、氏の令息と私とは、高等學校から大學を共にした友達同士で、或る日その郊外の驛のプラット・ホームで數年振りに再會し、その時の約束通り、久振りに彼の家を訪問することになつた處から、このささやかな話は始まる。例の戦争がそろ／＼始まりかける頃のことであつた。

約束した日曜日の午後、彼はすぐ戻つてくるといふことで、私は老夫人に案内されて茶の間に通つた。老夫人の眼立つて小じんまりされた印象に、まづ私は驚いたが、續いて向ひ合つたX氏の、老い込まれた様子は一層私の胸を打つものがあつた。不健康といふのではなく、それは文字通りに老い込まれた感じで、ふとり肉の少々大柄な體にすつかりたるみが生じてゐた。

それにしても、言語動作のいんぎん、鄭重さは、舊に倍するものがあつた。

「お父さん、昔よくお見えになつた、良英のお友達の池さんですよ」

老夫人の説明で、私に挨拶されるX氏の辭宜は莊重ですらあつた。

「これはこれは、よくお出で下さいました。良英が、いつもお世話に相成りまして」

腰高な出窓を背にしたX氏の座は、いかにもX氏の坐り馴れた居所であるらしく、壁際には、黄色く背の焼けた懐しい同氏著の數學早分りが數冊、學士會名簿や、中學高等學校の同窓會名簿などが、整然と積まれてあつた。なつかしいと云へば、例の黒い鞆も、多少手擦れは眼に立つが、昨日見たばかりのやうな、あの仔豚のふくらみもそのまゝ、X氏が手を伸ばせばすぐ届く出窓の上に置いてあつた。

老夫人の話で、X氏が三四年前に某中學を辭職し、その後通つてゐた神田の數學講習會の方から、手を引かれたといふことを私は知つた。老夫人のてきばきした話の間、X氏は稍々うつ向き加減に、膝に手を置いて端坐して居られた。

老夫人が茶の間を去ると、良英君との交渉を中心にした、昔話をぼつりぼつりするのが唯一の私の話題であつたが、X氏は鷹揚に、「はい」「はい」と、同じ調子で短い相槌をうたれるのみであつた。

程なく玄關の開く音がして、良英が歸つたかと思つたが、「唯今！」といふ聲音や、廊下を來る足音の若々しい荒さは、おそらく彼のものではないかと、私はさとつた。茶の間への入口で、もう一度大きく、「たゞいま！」と聲をかけ、包みをどさりとほうり投げてから、私といふ客のあるのに氣付いた少年は、良英とは十も違ふ末弟であつた。中學の三四年生らしく、發育盛りの容貌のうちにも、幼な顔はすぐそれと感ぜられた。

「池です。……しばらく」

微笑みかける私を瞬間見つめたが、彼も私をすぐ思ひ出したらしく、口の中で「あ」といふ風な聲をもらし、

「しばらくでした」と、改めてお辭宜をした。

もの靜かに、ぢつと端坐してゐたX氏が、どうしたものか鄭重に令息へ禮を返してゐた。

「これはこれは、よくお出でになりました」

良英君の弟は、もうその時、ひらりと茶の間を去りかけてゐた。X氏は相變らずもの靜かだつたが、私の當惑は極度に達した。すると、再びX氏の鷹揚な言葉があつた。

「失禮でございますが、貴下様は、どなた様でございましたか？」